

受難節第5主日礼拝説教「杯を酌み交わす」予稿

日本基督教団石神井教会 2025年4月6日

【旧約聖書日課】創世記 25章29～34節

²⁹ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。³⁰エサウはヤコブに言った。

「お願いだ、その赤いもの（アダム）、その赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。³¹ヤコブは言った。

「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください。」

³²「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」とエサウが答えると、³³ヤコブは言った。

「では、今すぐ誓ってください。」

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。³⁴ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章1～11節

¹従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。²キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。³肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。⁴それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。⁵肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。⁶肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。⁷なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従いえないのです。⁸肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。⁹神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。¹⁰キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。¹¹もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

【福音書日課】 マタイによる福音書 20章20～28節

²⁰そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。²¹イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」²²イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、²³イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」²⁴ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。²⁵そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。²⁶しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、²⁷いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。²⁸人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

主イエスの旅【こども説教のために】

主イエスは、旅を続けて来られました。洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられたときから、弟子たちをお連れになられて、旅を続けて来られました。その旅も、まもなく終わりを迎えます。目的地が近いのです。

その旅の終わりに「多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活する」(マタイ 16:21) と、主イエスは弟子たちにおっしゃられていました。「殺される」と言われたので、弟子たちは驚き、「そんなことがあってはなりません」(同 16:22) と思いました。けれども、主イエスが旅の行く先を変えられることはありません。弟子たちは、ただ「三日目に復活する」という主イエスの御言葉だけを頼りに、従い続けました。「旅の終わりに復活されて、王座のような素晴らしいところにお連れくださるかもしれない」と心密かに願いながら。

旅の終わりが近づいたとき、主イエスは、弟子たちにおっしゃいました。「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になりなさい。いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい」。弟子たちを旅にお連れくださった主イエスは、弟子たちを「偉く」してくださるのでしょうか。「いちばん上」にしてくださるのでしょうか。分かりません。それは、天の父がお決めくださることです。ただ、主イエスは、旅を共にする弟子たちに、「皆に仕える者になるように」、「皆の僕になるように」とおっしゃいます。それが、主イエスの続けて来られた旅の目的でいらしたからです。

「何が望みか」

先週、わたしたちの教会は、深い悲しみのうちに一人の姉妹の葬りをいたしました。3歳のお子さんのいる、まだ40歳の姉妹です。石神井教会の交わりの中で過ごされたのは一年半ほどの期間でしたが、初めておいでになられたときには、ご病気が進行していらしたのです。治療の影響もあって、礼拝においでになられたときには、帽子を被られたままのことが多くありました。姉妹は、15年前に台湾の教会で洗礼を受けていましたが、石神井教会に出席されるようになって間もなく、日本人のご夫君も洗礼をお受けになられたのです。それは、姉妹のご病気に向き合われたご夫妻が、同じ信仰に拠って立ち、歩むことを願われた末に与えられた恵みであったと言えるのでしょうか。

訃報を受けてご自宅をお訪ねしたとき、ご夫君は、姉妹の枕元に置かれた『聖書』を取り上げて、お見せくださいました。洗礼に際して、教会からお送りした『聖書』です。そして、「ずっと二人で読み進めてきました」とお話しくださいました。『聖書』を道標に、お二人は、祈りの旅を続けて来られたのだと思いました。姉妹の病気のために、互いのために、そして家族のために、お二人は、祈りの旅を続けられたのです。あるいは姉妹の旅は終わりが近いことを覚悟しながら、お二人が続けられた祈りの旅は、互いに仕え合う者とされていく道であったのではないのでしょうか。お二人が重ねられた旅の終わり、姉妹の旅の終わりに、わたしたち教会は、証人として立ち会ったのです、その旅の道を先に進むご夫君やご家族と共に行くために。

わたしたちは、自分の旅の終わりに、何を望むのでしょうか。教会に導かれ、主イエスに従う者となるように招かれ、その道を旅行く者たちの群れに加えられてきました。主イエスの導いてくださる旅の一行に加えられた者のしるしとして、洗礼の恵みも与えられてきました。それは、「神の国」の国籍を与えられた者の「パスポート」のようなものなのかもしれません。紙の「パスポート」が発行されていなくても、わたしたちは、世界中どこに行くにしても、何かあれば、「神の国」の「大使館」あるいは「領事館」として助けてくれるところがあることを、知っています。「教会」です。どこの「教会」に行っても、「洗礼を受けている」と言うだけで、歓迎され、助けてくれることでしょうか。けれども、そこが旅の目的地であるわけではありません。

本国である「神の国」に行き着くことが、旅の終わりに望むことでしょうか。それは、確かにすばらしいことかもしれません。すべてが神の光の中にあり、輝く姿の主イエスの傍らに憩わせていただけるならば、すばらしいことかもしれません。そうだとしても、わたしたちが旅の終わりに望むことは、それだけではないでしょう。目的地ではなく、この旅そのものを、共に歩んできた者たちと、まっとうしたい。それが望みなのではないでしょうか。

主イエスの杯を飲む

主イエスの旅に伴ってきた弟子たちは、その旅がまもなく終わりを迎えようとしていることを告げられて、戸惑ったに違いありません。彼らには、旅の終わりを迎える準備ができていなかったのです。

この旅は、主イエスに誘われて始めたのです。「わたしについて来なさい」と呼びかけられ、旅の一行に加わってきました。旅の主宰者は、主イエスです。この旅で驚くような出来事が続くのは、主イエスが旅の主宰者だからこそです。「この方を抜きに、自分たちの旅はない」と、弟子たちのだれもが、考えていたのに違いありません。いつ終わるとも知れない旅、いつまでも続くと思われていた旅、いいえ、続いてほしいと願ってきた旅です。

その旅の日々に、弟子たちは、主イエスと幾度、食事を共にしてきたことでしょうか。特別な食事の体験もありました。安息日の午後に招かれた屋敷に、主イエスが大勢の罪人や徴税人を引き連れて行かれたこともありました。皆が眉をひそめる中、主イエスが彼らと堂々と食事を共にされたのは、痛快な出来事でした。山の上で大勢の人に教えられた後、わずかなパンと魚を数千人の人々と分け合うという饗宴を催したこともありました。大邸宅の祝宴とは比べようもないものでしたが、だれもが大満足して帰って行ったのです。

そのような特別な体験には数えられない、日々の食事を、弟子たちは主イエスと重ねてきました。パンと魚と野菜、ときには肉も並んだかもしれません。そして、杯です。ぶどう酒の注がれた杯を、主イエスが高く掲げて神に感謝し、祝福されて、食事は進められました。「飲み会」をしていたわけではありません。杯を祝福し、ときに一つの杯を回して飲むとき、その食事は、ただ腹を満たすだけの時間ではない、特別な時間となったのです。神のお与えくださる同じ恵みを分かち合う仲間となったのです。

わたしの育った家には、正月に用いる屠蘇器がありました。子ども時代、元旦の食卓に置かれた屠蘇器の杯が回され、苦くてまずい薬のような飲み物を飲まされるのは、少し苦痛でもあり、しかし喜びでもありました。この儀式に加わることが、家族の一員とされていることだったからです。

「このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか」と、主イエスは言われました。弟子たちは、主イエスの杯を日々、飲みながら、旅を共にしてきました。杯を分かち合うことを通して、旅を共にする仲間、いいえ家族として互いを知るようになっていました。その杯は、今、旅を終えようとする主イエスの望みで満たされているのです。わたしたちもあずかる、主の食卓の杯は、主イエスの望みで満たされているのです。

「この杯を、あなたは飲み続けるか」。わたしたちは、飲み続けるでしょう。旅を続けるために、飲み続けるでしょう。目には見えない主と共に。